

砂浜 井上貴之（32）生地の薄いシャツを着て、貴之の目を瞋つて、仰向けに寝転んで、
 くるゝ貴之の耳には、さざ波の音だけが聞
 こえてゐる
 の声「見える事か？ 見えぬ事か？」
 貴之の不幸せなのか？ 僕は：幸せか？

○
△動物園・猿山・前（以下回想）
△（30）と竹内真希（32）、二人

真希

貴之、サングラスのテンプルの部分で2。貴之の手を引っ張って猿山の方へ行く。真希、猿山を見つけて！指を差し、

真希

「真希、猿山の一番上に居る猿を指差し、あの猿の方を見ている。」

貴真
之希

「貴之、猿山のの方を見てゐる。真希、貴之の方を見てゐる。」

真希

真希、貴之のサングラスを取り、テンプ

真希

「やっぱり、電源切ってる」
 サングラスのテンプルの部分を触ると、
 小さな駆動音が鳴り、少し赤く光る。
 「せっかく見えるようになったんだから、
 一緒に見よう」
 貴之、猿山の方を向いているが、両目は

貴真
之希

「慣見猿の貴真貴猿、
れえに、威之希之、威
なて威猿貴少嚇
いた嚇山之しる
んだ方がしの方にビ
。いいをエンつう
音いで。見るグてに
でし。とラいる鳴
聞いてよ、をスるき
て？、ボ、様始
る方、ス、ける。める。
が、ザル、他
見

真希「虫じゃないよ」

貴之「バリングして返えら。せると、ハチドリ、ホ

ハチドリ。綺麗：。顔を動か

真希「この子、貴之のこと好きなんじゃない

貴之「痛っ」

真希「首を抑える。どうしたの？」

貴之「嘘？ 痛い。ちよつと、休憩しよう」

貴之「手を取つて歩いて行く。」

○ 真希「同・カフエ、座っている。」

貴之「大丈夫？ 手を当てながら、

真希「病院へ行つた方がいいんじゃない？」

真希「マホを出す。」

貴之「マホを出す。」

真希「マホを出す。」

真希「マホを出す。」

貴之「マホを出す。」

真希「マホを出す。」

真希「マホを出す。」

真希「マホを出す。」

真希「マホを出す。」

